イラスト(さし絵)部門《一般の部》

課題原稿

ハピミツや

ストーリー部門
一般の部　最優秀賞
作：糸畑 くみ

※こちらの原稿は、中学生以上の方が対象の課題です。

（　　）この枠で囲んでいる箇所がイラスト(さし絵)の課題場面です。

課題 1

表紙

①
まちの　まんなか、1本の木にミツバチかぞくが、まいおりました。
「さあ、ここに　あたらしいうちを　つくるのよ」
ミツバチかあさんのかけごえに
「はーい!」「ようし!」
ミツバチむすめたちは、はりきりました。
「さあ、花のミツを　あつめておいで」
「はーい!」「いってきまーす!」
ミツバチむすめたちは、元気よく　新しいうちをとびだしていきました。

②
ところが、ミツバチむすめたちは、うかないかおで　すぐにもどってきました。
「なんだか、とってもくらい　いんきなまちよ」
「ここらへんには、花が　あんまりないわ」
「まあ、そう、こまったわね。たくわえのはちみつも、そのうち　なくなるわ。何とかしなきゃ」
ミツバチかあさんは、ブブブ　はねをふるわせ　かんがえて、
「ひらめいた!」と言いました。

③
ミツバチかあさんが、木のえだに　ぶらさげたのは、「ハピミツや」のかんばんです。
「え一!　かあさん、お店なんて　ひらいても、売るものが　ないわ」
「それにハピミツってなに?　はちみつじゃなくて?」
「まあ、見てなさい。ハピミツや、オープンよ!」

④
つえをついたヤギじいさんが　やってきました。
「どっこらしょ」
木の下のベンチに　こしかけて、ふと上を　見上げました。
「ハピミツや、とな?」
「ブブブン、はいはい、いらっしゃい。あら、なんだかおつかれですか?」
「はあ、わしゃもう、目は　しょぼしょぼ、こしは　がくがく、ちょっと　さんぽも、やれこのとおり」
「あらあら、じゃあとくべつに、うちのハピミツ3てき　サービスしましょ。気に入ったら　またごひいきに」
ミツバチかあさんは、しずく3つぶんの　ハピミツを、はっぱのおさらにのせて、さしだしました。
「ふうん」
ヤギじいさんは、ぺろりと、ひとなめ。

⑤
「んんん!　あまあい!　もっとおくれ、買おう　買おう、いくらじゃね?」
「ブブブ、お金はいりません。お花をください」
「花、じゃとな」
「ええ、このあたりは、花が　とっても少なくて、こまっているんですの。花がないと　ハピミツが作れません」
ヤギじいさんは、立ち上がると、あたりを見ました。
「ふうむ　そうかね」

⑥
ヤギじいさんは、きょろきょろ花をさがしました。
「ううむ、ほんとうじゃ、どこにも花が　さいていない」
ほそうされた道、たちならぶビルやアパートの灰色のかべ。
すれちがうキツネのごふじんや、ネコの若者、みんな、うつむきかげんに見えます。
ヤギじいさんは、あるきました。ふしぎに体がかるい気がします。
「ああ、またハピミツがなめたいのう」

⑦
ヤギじいさんは、とうとうまちはずれの野原までやってきました。
「おおここには、たくさんの花がさいておる」
ヤギじいさんは、よろこんで花をつみました。
青い花、白い花、黄色にピンク、ひとかかえの花たばになりました。

⑧
ヤギじいさんは、花たばをかかえて、ハピミツやに　いきました。
「まちはずれの　野原へ行って　つんできたんじゃ」
「まあ、ブブブン　ありがとうございます。さあ、むすめたち、ミツをいただきなさい」
「はい」「はーい」「わーい、すてきな花だわ」
ミツバチむすめたちは、てきぱきと　ミツをあつめます。
そのあいだに　ミツバチかあさんは、はっぱのおさらに　ハピミツを入れて
「さあ、どうぞ」
「これこれ、あまあい。ばあさんにも、あげたくてね。さいきん元気がなくてのう。うちにとじこもっておるんだ」
「まあ、そうですか。じゃあこのゆりの花の中にハピミツを入れますから、花たばごと　おもちかえりになって」
ヤギじいさんは、ほくほくがおで　かえっていきました。

⑨
ヤギじいさんは、アパートの扉をあけました。
「ただいま!　ばあさん、プレゼントじゃ」
と花たばを　さしだしました。
ヤギばあさんは、ほそい目を丸くして　うけとりました。
「ほら、このハピミツをなめてごらん」
「ハピミツですか?」
ヤギばあさんは、くびをかしげて、ゆりの花の中を見ました。そして、とろんと入っているハピミツを　ひとなめしました。
「まあ!　あまあい」
それからヤギばあさんは、花たばをかびんにいけて、にっこりしました。
「へやの中が明るくなったわ。おじいさん、ありがとう。ああ、ハピミツ、おいしかったわあ」

（⑨の続き）
うっとりするヤギばあさんを見て、ヤギじいさんは　ハピミツやの話をしました。
「そういえばおじいさん、つえはどうしたの?」
「おや、すっかりわすれておった」
ふたりは　かおを見合わせて　わらいました。
「そうじゃ、ベランダの　うえきばちに、また土を入れて　たねをまこう」
「いいわねえ。花でいっぱいにして、ミツバチさんたちをしょうたいしましょ」

⑩
次の日、ヤギじいさんとヤギばあさんは、すっかりほうっておいた　うえきばちに土を入れて　たねをまきました。
水やりをしていると、となりに住む　うさぎねえさんが　かおをだしました。
「たのしそうですね」
「おや、うさぎさん、久しぶりですのう」
「そうですねえ、ちかごろ　わたし、るすが多くて」
「わしらも、きもちがふさいで、へやにとじこもっておったからのう」
「うさぎさん、お元気?　かお色がすぐれないようにみえるわ」
「ええ、ちょっと、仕事がいそがしくて」
「おやおや、ぜひ、ハピミツやに　行ってみるといい」
「そう、お花を持ってね」
「へえ、ハピミツや、ですか」

⑪
うさぎねえさんは、まちはずれの野原で花をつんで、ハピミツやを　たずねました。
「ブブブン、いらっしゃいませ、ハピミツやへようこそ」
「あの、ヤギさんごふうふに　聞いてきました」
「まあ、そうですか。さあ、むすめたち、ミツを　いただきなさい」
「はい」「はい」「はーい」
ミツバチむすめたちは、てきぱきと　ミツをあつめます。
そのあいだに　ミツバチかあさんは、はっぱのおさらに　ハピミツを入れて
「さあ、どうぞ」
とさしだしました。
「いただきます」
ぺろりひとなめ。うさぎねえさんの耳が　ぴーんとたちました。
「あまあい。ハピミツ、ですか。こんなたべものがあるんですねえ」
「はい、気に入ってもらえたら、どうぞごひいきに。お花をたくさんまっています」
「はい!　知らせます!」

⑫
うさぎねえさんは、スキップしながら　しゅっきんして席にすわると、いそいで記事を書きはじめました。
うさぎねえさんの仕事は新聞記者なのです。
書いているあいだ、仕事場のみんながうさぎねえさんに聞きました。
「何かいいこと　あったのかい?」
「うふふ、今それについて　書いているところ」
「へえ、いいニュースなんて、久しぶりだねえ」

課題2

⑬
つぎの日、まちは　ハピミツやのうわさでもちきりです。
お花を手にお客さんが、つぎつぎ　やってきます。
「ブブブン、いらっしゃい」
「大きな　しっぱいをしてねえ」
たてがみしなしなの　ライオンおじさんです。
ハピミツをひとなめ、ごくん。
「ああ、あまあい。うん、そうだなあ。ぼちぼちやるか」
ライオンおじさんは、しみじみうなずきました。たてがみが少しピンとしました。
「ブブブン、いらっしゃい」
「うわーん、あたしなんて　みりょくないのかしら」
しつれん　なみだで　ぐずぐずの　ブタのおじょうさん。
ハピミツをひとなめ、ごくん。
「んん、あまあい。おいしい」
「あら、えがおになった。そのほうがすてきよ、ブブブン」
子どもを　いっぱいひきつれた　イノシシかあちゃん。
けんきゅうに　いきづまってしまった、サルはかせ。
かぜひきマスクの、イヌのにいさん。
へとへとで　ちからのでないクマの大工さん。

⑭
ミツバチかあさんも、ミツバチむすめたちも　大いそがしです。
「ブブブ、はい、お花のミツいただきますね」
「ブブブ、さあ、ハピミツどうぞ」
おきゃくさんは　ひとなめ、ほっこりえがおで　かえって行きます。
ハピミツやの木のまわりは、花でいっぱいになりました。
かびんの花たば、はちうえがならびます。
こぼれたたねが　めを出して、ぐんぐんそだちます。そしてまた花がさくのです。
ミツバチむすめたちは、せっせとミツを　あつめます。

課題3

⑮
やがて、まちじゅうに花がさきました。
花だんに、道ばたに。まどべには　色とりどりのはちうえです。
あちこちで、子どもたちのあそぶ声、住んでいるみんなの　わらう声が聞こえます。
いもうとたちが、たくさん生まれて、ミツバチかぞくが　ふえました。
「ハピミツや、大せいこうね」
「かあさん、おつかれさま」
「ハピミツどうぞ」
ミツバチむすめたちは、かあさんの　かたたたき。
ミツバチ母さんは目を細めて、ブブブンとわらいました。